知ってもらい、国消国

て国内農業の重要性を

なので、消費者に対し 住民は消費者が大多数

ことが私たちの使命だ 産・地産地消を進める

と考える。そのために

化

事業承継の問題は

中村 農業者の高齢

京にはスーパーマーケ

ットやコンビニがたく

未来に向け地域と共に歩 JAにしたま も地域住民の皆さんと

甲村勝司組合長に聞く

中村勝司さんに決意を聞いた。 代会後の理事会で代表理事組合長になった 6月に開催された西多摩農業協同組合総

のJAなので大いに利 本になる。農業者の底 用してもらうことが基 組合員の皆さんあって 地域と共に歩みたい。 上げを図りたい。 共にある。 JAにしたまの課題 新組合長として抱負 JAは地域と 未来に向け 全国一律の課題にな ビス、食品や日用品の に取り組みたい。 までも人材確保に苦慮 る。また、JAにした の生産・販売以外にも 販売も行っている。東 金融や共済業務のサー については。 している。働き方改革 中村 JAは農産物 地域とつながるJA

okamura.nobuyoshi@gmail.com 地方のJAとは地域と さんあるが、地方では のかかわり方も変わっ たち都市部のJAは、 ラを支えている。 私 てくる。都市部の地域 舗として生活のインフ JAが地域の身近な店 業は地域住民からの理 経営の継続を支えてい きたい。また、都市農 解が必要で、そのため にJAでは収穫体験や

society&business Tokyo25 journal

みは。 物を販売するために直 対し生産の技術指導を ければならないと感じ 深め、身近な存在でな 日々のかかわり合いを 直売所やJA店舗での 行い、生産された農産 の確立に向け、 を営むために、農家に したまとしての取り組 中 村 持続可能な東京農業 継続して農業 農業の魅力を知って頂 を通じて発信し、都市 を入れている。

上げを図 業者の底

パーマーケットへの出 また、学校給食やスー

売所を運営している。

荷についても支援して

定させることで、農業 いる。農家の収入を安 ている。こう 消を実践し により地産地 出荷先となっ 農家でも気軽 に販売できる した販売方法

の活性化を図りたい。 とってなくてはならな 組合員をはじめ地域に 切さを広め、管内農業 いJAにしたまであり 中 村 地産地消の大

食育イベントを行って いる。更に広報活動と 情報をSNSや広報誌 や直売所の旬の農産物 して、頑張る農家の姿 践にもなっている。 抑えることにも繋がる を圧縮し、省エネの実 がっている。併せて、 のでフードマイレージ 輸送の距離やコストを 生産物のブランド化

くための取り組みに力 効性は。 直売所の有 地域ブランドとして名 ラメンや東京狭山茶は との連携は。 中 村 瑞穂町のシク

中 村

域住民の食卓 た、小規模の に届けること の農産物を地 所は採れたて ができる。ま に新鮮なうち 直売 を受けた農家、農産物 さは当たり前で安全安 市の根がらみ前の水田 り出してもいる。羽村 の落花生を「はっ!ぴ 認証制度があり、JA 東京都にはエコ農産物 心に力を入れている。 視点は異なるが、新鮮 ップを植え、春の観光 は米の裏作でチューリ にしたま管内には認証 を上げている。福生市 目玉になっている。 ☆ナッツ」として売

をアピールしてほし 改めてJAにしたま

育委員会が主催し、市

民ら50人余りが参加し

繁忙期に集中して作業 間を作るために比較的 営を手掛けており、「時

などを語った。同市教

を行う苦労、やりがい

障害者福祉施設の運

畑を守り農業を継い いたが、 だ。一緒に農業ができ んは金融機関に勤めて 「父親から託された田 米農家の清水亮一さ

それは国内農業への理 への取り組みは。観光

農業者がやりがい、 羽村でトークイベント「Youtology」

3人の農業者が就農の y (ユートロジー)」 きっかけ、羽村で農業 ストから地元に関する 緑ケ丘)で開催された。 が9月2日、 F You to log 話を聞くトークイベン ールゆとろぎ(羽村市 地域に深く関わるゲ プリモホ 先輩に教わった」とい う。「父親が仲間と冬 た時間はわずかだった なっている。 水のまつり」の主役と りの花は「はむら花と き継いだ」。色とりど てたチューリップも引 の裏作として球根を育 ため、農作業は近所の

地産地消に力

を注

40歳で退職。 る」とやりがいを語 れば、仕事が楽しくな 族が楽しく過ごしてい 業はできない。その家 族の協力がなければ農 作っている」とし、「家 ができる米や花などを

た。家族で



農地を失くさないため 園」の中村大輔さん、 られる花農家「喜久樹 イチゴやトマトで知ら シクラメン栽培で知

熱心に耳を傾ける参加者ら

ーマーケット、生協な どに出荷し 手入れと収 から夜まで ている。朝 同イベント。

経ち、何と が、農業に 穫の繰り返 携わり5年 事を任せて か自分で仕 面もある しで大変な で購入し、応援してほ 野菜、花、米を直売所 聞かれた。登壇者から 業を応援していったら は「市民の皆さんには の立場でどのように農 いいか」との声が多く 参加者からは「市民

農家に養子で入った。 安達久登さんの2人は ぐ野菜農家「羽村VS る」とした。 比較的自由に取れてい しっかり取り、休みも コミュニケーションを

当し、毎日一緒だが、 働いている」と日課を 妻がネイリスト、私が 語り、「妻が経理を担 主として行うなど、自 手伝いの人を含め忙し 荷している。水やりと ハウスで花卉を栽培 い日は最大10人ほどが る時間から夕方までお などの作業で太陽が昇 出荷、土づくり、施肥 設計の仕事を個人事業 し、直売所や市場に出 中村さんは「13棟の のコシヒカリと羽村の をつくろうと、羽村産 ある農地は計38%。近 り組む「酒はむら」に。 留所を羽村市に建てた 地下水による日本酒づ うと思った。農地を失 清水さんは「羽村市に る。今後は米焼酎の蒸 くりを始め5年目にな くさないために特産品 いと活動している」と い将来、消滅してしま 話題は清水さんが取

野菜は直売所、スーパ く確保している」とし 由で楽しむ時間をうま 安達さんは「育てた 羽村市の過去や今起き 作っている『モノ』、 まりが欲しい」という て知ることができる集 ている『コト』につい まだ知らない、羽村市 報告した。 市民の声から生まれた の『ヒト』、羽村市で 住んでいてもまだ

うになっ もらえるよ しい」との答えが返っ